

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 Didik Nurhadi

論 文 題 目

日本語論説文の文章構造

論文審査担当者

主査	名古屋大学准教授	宮地朝子
委員	名古屋大学教授	釘貫 亨
委員	名古屋大学教授	町田 健

# 論文審査の結果の要旨

## 【本論文の概要】

本論文は、文章論の観点から新聞社説を分析の対象とし、筆者の母語インドネシア語と比較対照しながら、日本語論説文の文章構造の特徴を分析したものである。

筆者は、従来の文章論が(1)文章の中心となる文や段落の所在と(2)文脈形成の様相という2つの分析観点を掲げて展開しながら、マクロレベルの(1)に偏り、しかも母語話者の直観に基づく内容理解を前提とした非明示的な整理に留まることを問題視する。これを打開すべく、(1)と併せ(2)のようなミクロレベルの観点からの分析を、いずれも客観的指標によって実践し、明示的な類型的整理を目指す必要を主張する(第1章)。

本論ではまずミクロレベルの分析指標として「反復表現」を取り上げる。語句の反復は、両言語ともに、文章の構成要素間の関係の表示、話題の導入、展開、転換、回帰といった文脈形成に深く関与する一方、その標示の様相が大きく異なるという。インドネシア語では、同一語句や指示詞、代名詞によって明示されるのに対し、日本語では、主に多様なレベルの意味関係に基づく関連語句によるため暗示的である。指示詞や接続詞の出現も要点の提示部分に特化されることから、日本語において、文脈形成や文章の構成要素間の関係表示は暗示的に行われるとする(第2章)。

次に、「提題表現」を話題の導入展開の指標とし、見解判断を表す「叙述表現」を統括の指標として、その分布から社説文章の類型的把握を試みる。両言語とも、書き手の見解が終了部のみで示されるA型と、開始部・終了部で提示されるB型が二大類型となるが、日本語の場合、加えてB型の特殊型(C型)とその他(D型)の4類型が得られるという。C・D型の許容が日本語の特徴と位置づけられる(第3,4章)。

さらに、マクロレベルの考察として、開始部・中間部・終了部の相互関係と特質が分析される。文章の主題を端的に示す「見出し文」の語句を指標とし、その反復出現の様相を観察すると、インドネシア語では「開始部反復型」「多重反復型」がそれぞれ3割、日本語では「終了部反復型」が4割を占めて最多であるという(第5章)。これは第3,4章での類型把握にも矛盾がなく、インドネシア語に顕著な、主張を冒頭で提示し、複数回繰り返すという性質が日本語にはないことが確認できるという。

開始部・終了部の特質は、「事実」を述べる文と「意見」を述べる文の分布の様相にも現れる。日本語社説では、開始部に「事実」文が、終了部に「意見」文が偏在するのに対し、インドネシア語では開始部・終了部ともに意見文の連続が高い割合で出現するという(第6章)。また、開始部と終了部の呼応関係を観察すると、言語形態を指標とするもの(話題の回帰、課題・質問・解決・回答の関係、時間的關係、対照的關係)と、言語形態によらず推論に基づくものが抽出把握できるという。このうち「時間的關係」はインドネシア語に見られず、日本語に特徴的であるとする(第7章)。

最後に総合的考察として各章の整合性をみながら相互関係を概括して結論とし(第8章)、発展的課題と日本語教育分野への応用を含む今後の展望を述べる。

## 論文審査の結果の要旨

### 【本論文の評価】

文章論は、修辞学や文学といった隣接分野との関わりが大きく、文法論とは一線を画した位置づけがなされることも多い。同じく文という単位を超える談話の研究がめざましい進捗を遂げ文法論全体の進展を担う現状とは対照的である。しかし文章の構造的把握が言語学的な問題設定に関与しないわけではない。母語話者にとって文脈展開や主題文の所在は直観的に把握可能である一方、日本語学習者は「一つ一つの文の意味はわかるのに、文章全体ではいいたいことがわからない」という切実な悩みに直面すると筆者はいう。このような困難の本質は、文章の構造、すなわち文を超えた単位の“文法”の、明示的な把握とその説明の欠如である。本論文の問題設定は、文章論のみならず日本語文法論の課題として正鵠を得ている。日本語文章の構造的把握を射程に、書き手の主張と論理の支えを持つ論説文を端緒とし、客観的指標の採用によって明示的な観察分析の実践を強く志向する点、またインドネシア語との対照によって日本語の特質を抽出しようとする点で、まずもって誠実果敢な正攻法と評価できる。

本論文で示された類型的整理の中には、例えば「A型」が先行説の尾括型、「B型」が両括型に相当するなど、斬新さが感じにくい側面もある。しかし従来は4~6種類の類型が離散的に提示され、ジャンルや文体ごとの偏りについて明示的に言及する立場は希である。本論文の指摘する日本語論説文の特質は、その意味で注目に値する。

一方、段（落）、開始部・終了部といった文章の構成単位や、統括性といった基本概念について独自の検討がなされなかった点は物足りなさも残る。テキスト言語学・談話構造研究の、一貫性・結束性といった概念を参照する必要性や枠組みの再検討の余地は小さくない。ただしこのことは、本論文の参照検討する先行論が国語学を背景とした日本語文章論を中心とすることにも起因する。発展的課題といえるだろう。

ほかに惜まれるのは、文法論の成果の参照援用が必ずしも積極的でなかった点である。分析の指標について客観性を可能な限り徹底追求するには、範列統辞的關係から抽出される文法範疇を枠組みとする選択も、また、例えば接続詞や指示詞のように、テキストの結束性に関与することが知られる文法形式をマイクロレベルの分析指標として優先的に取り上げる方法もあっただろう。しかし、文章構造の全体的把握を目的とした本論文では、頻度の低い文法形式よりも、全体にわたって分布する提題叙述表現、反復表現が指標としてまず選択された。この点は、むしろ合理的と見るべきである。本論文では、日本語の指示詞・接続詞、インドネシア語の提題表現について、文章内での機能に関する示唆的な記述も行われ、文章論から文法論への寄与の可能性も示された。文法論の成果との関連づけは、本論文の把握を多角的に検証する今後の実践のなかで果たされるべき発展的課題といえ、本論文の価値を損なうものではない。

以上により、審査委員は全員一致して、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。